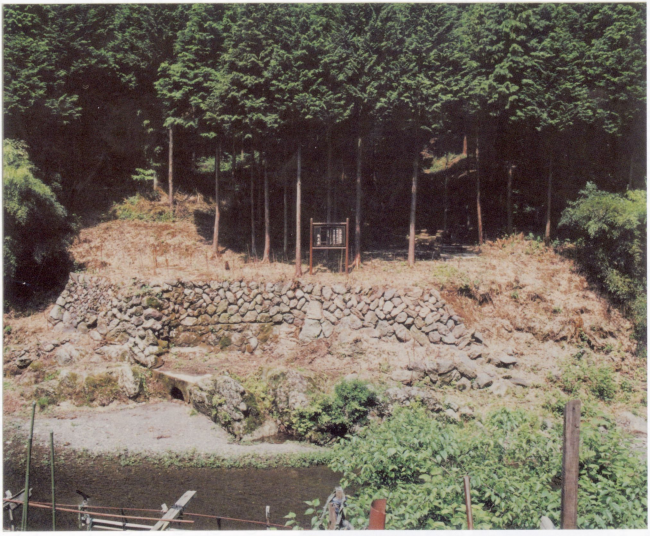
郷土はんのう

第２６号



吾野水力電気(株) 発電所跡

目　次

◆猛暑と和菓子（加藤実生）・・・・・・・・・２
◆赤沢村の宗門人別書上帳について
（中里和夫）・・２～３
◆「カヌー工房への歩み」（山田直行）・・・・・４
◆名栗・飯能の石仏（坂口和子）・・・・・・・５
◆飯能のまち物語―織物を中心にして―
（松本英男）・・・・６
◆随筆　縁側の思い出（田嶋和子）・・・・・・・６
◆郷土館の特別展
「飯能の水力発電」を開催して（柳戸信吾）・・７
◆飯能郷土史研究会の活動・・・・・・・・・８
◆ホームページの紹介（岸　道生）・・・・・・８

猛暑と和菓子

加藤実生
良夢

平成十六年、記録的な猛暑の夏に行ったこの調査は、私が食文化に興味を持っているので、生まれ住んでいる飯能市で和菓子屋をテーマにしてみようと取材を申し込んだ。私は聞き取りと写真撮影を、弟は絵に描くというふうに分担して記録した。飯能には昔から個人営業の手づくり和菓子屋が多いので調査しやすく、対象として適していると思ったからだ。

ひと口に調査と言っても記録的な猛暑の中を耐えて調査したことで、店ごとに色々な出会いがあった。初めて行った店では、店主が年配で質問、返答がはかどらなかったこと。ある時は店主から一方的に断られたり、寄付を頼う人と勘違いされたりした。自転車で行ってみたら定休日だったという事や時には四回も同じ店を尋ねたこともあった。むろんそんなことばかりでなく、好奇心旺盛に調査に応じてくれた店主、初めて の事なのでうまく答えられない店主、昔話、自慢話をしてくれるなどといろいろ楽しい経験もした。他にも、店は継いだがお菓子は継がずに、自分で修行した菓子を作って売る良き頑固店主。健康を考えて菓子をつくる跡継ぎの人。現代の子供の味覚を考えて洋菓子風の和菓子をつくるなどといった現代を生きる店主を行く先で見ることができた。

取材した店の和菓子を買って家で試食した。見た目は同じ商品でも他の店と何が違うのか。この店の美味しさ、それぞれの個性を見つけられた。でも、毎日和菓子を食べて評価・記録をすると言うのは、けっこう緊張する。判ったことは各店の店主は二代目以降で、店を創立した初代の店主はどの店にも存命していない。つまり、飯能の和菓子屋のほとんどが、かなり前から営業していたという事です。商品は、まんじゅうか酒まんじゅうが全ての店において販売されている。値段は各店によって違うが、百円未満（七十円から九十円）が標準価格である（平成十七年春から夏現在）。店の立地条件は、人通りが多いほうがよく売れると思っていたが、今回の調査ではそれに当てはまるような事はなかった。駅前、路地裏に関係なく、客の数は好調で「味が良ければ顧客は付く」という感じだった。駅から離れた場所にある店でも、高校の茶道部や公民館利用者のまとまったお注文が継続的に入っているようだ。

これほど食べていても、調査や記録のためではなく、夜に甘い和菓子を味わうと、私はその日の疲れが癒されるのを感じた。「この良い調査体験を将来に活かそう」と思っている。

取材に協力してくださった店主の皆様に深く感謝しております。

追記　島田屋さんのように無くなってしまって残念な店、商品がたくさんあります。思い出されたことがありましたら、加藤へお知らせください。

○次の資料を参考にして調査しました。

○民俗調査ハンドブック　（吉川弘文館）

○NTT電話帳（職業別）

○飯能のたからもの　（柳沢陽子）

○地図・はんのう味めぐり　（木村屋さん提供）

○戦闘糧食の三ツ星をさがせ　（光人社刊）

新島田店舗の前で筆者

赤沢村の宗門人別書上帳について

中里和夫

私の所属している飯能市古文書同好会は日頃浅見徳男先生のご指導のもと、飯能市郷土館所蔵の古文書を輪読しているが、最近は旧赤沢村（現飯能市赤沢）の浅見家に伝わる文書に取り組んでいる。

そのうち、最近読み終えた安政四年の宗門人別書上帳を取りあげ、披露したい。

一、宗門人別書上帳

内容的にはいわゆる宗門人別書上帳とほぼ同じと思われるが、馬を持つ家も記載されており、家数人馬書上帳の内容も包含されていると考えられる。

一例として同帳からつぎの文を抜粋してみる。

高三石四斗弐升
一同宗同寺　旦那　初五郎　廿九
（注）曹洞宗圓福寺の略
父　五松　六十五
兄　伊之助　三十五
女房　あき　廿四
馬　壱匹
三人男
小以四人内
壱人女
（注）宗門人別改帳は宗門改めと

人別改めを複合し、村ごとに作成して、領主に提出した戸口の基礎台帳、これに対して家数人馬書上帳はあくまで再生産単位の家を対象とし、表現している。

二、記載寺院

済家宗本願寺　飯能市赤沢二四一・一
済家宗金錫寺　赤沢一五八
済家宗勝輪寺　赤沢五二七
済家宗圓光寺　赤沢七六四一
（注）臨済宗の別名
曹洞宗圓福寺　久林一〇四九・一
曹洞宗龍泉寺　下名栗五八三

三、宗門人別書上帳の分析

この分析（下部表参照）のみでは現代人のわれわれの人口は、家族との対比に終り、通時的共時的な歴史上の理解、把握はえられないが、すでに天保三年の同帳は翻刻済であり、さらに複数の異なる年代の同帳の存在が確認されている。

現在、飯能市郷土館主査尾崎泰弘氏がこれらの資料も含めて、さらに詳細な史料分析を進めていることに大いに期待しているが、われわれ古文書同好会も引続き一連の浅見家文書の翻刻を通じて、史料の充実に向けて、側面支援を果たしていきたいと思っている。

四、まとめ

本文の分析は前述のとおり未完成の域を出ないところであるが、百聞一見にしかずで、昨年秋、浅見徳男先生の引率のもと、飯能市古文書同好会有志一同で赤沢地区を探訪した。一部が住宅地化しているものの、自然が残っている村里で浅見家文書の当時の面影を彷彿することができ、浅見家文書の翻刻にあたってはこれまでの家文書だけの解釈だけでなく、風土面も加味して肉付けしたいと希求する心境にもなった。

さらに記載の寺院の墓地（下名栗の龍泉寺を除く）を巡るに及んで、前述の尾崎泰弘氏の史料分析に加担したい思いにかられたものである。

浅見徳男先生がこの宗門人別書上帳を翻刻するにあたってつぎのように講義されたことがある。

すなわち当時の山間部は林業の経済力に加え、山の幸（川も含む）も豊富であり、したがって生活は豊かで、比較的人口も多い。平野部の飯能にも依存せず自立していたのでなかろうか。有力者も名栗をも含めて、多く輩出している。

赤沢を探訪した際、まさにこの講義を思い出したものである。

宗門人別書上帳の分析

【年齢】

	数値	要素	備考
平均年齢（全体）	33.1歳		
平均年齢（男性）	30.6歳		
平均年齢（女性）	32.4歳		
平均年齢（世帯主）	43.8歳		
最高齢（全体）	84歳	又右衛門・かん夫妻（NO.11）	
最高齢（世帯主）	84歳	又右衛門（NO.11）	
世帯主の最若年	16歳	熊吉（NO.49）	

【家族構成】

	数値	要素	備考
1世帯あたりの平均人数	4.69人		
1世帯あたりの最高人数	13人	NO.43（才次郎）	うち下男4

【経済構造】

	数値	要素	備考
平均石高	2.45石		
最高石高	25.5石	NO.43（才次郎）	名主
最低石高	0.03石	NO.60（勧次）	4人家族
下男・下女等をもつ家	1軒	NO.43（才次郎）	
下男・下女等をもつ家の平均石高	25.5石		
馬をもつ家	4軒	NO.85・92・103・106	記載なし
馬をもつ家の平均石高	3.68石		

【人口構造】

	数値	要素	備考
男性	292人		記載があるのは303人
女性	248人		記載があるのは252人
僧	6人		
山伏	2人		
道心	0人		
医師	1人		
総人口	548人		記載があるのは555人
世帯数	118軒	内4軒寺	

（注）飯能市郷土館主査尾崎泰弘氏分析による。

郷土はんのう

「カヌー工房への歩み」

山田直行

平成16年4月　皇太子殿下をお迎えする筆者

今から二十年ほど前に名栗村に移り住みました。

当時は入間市のマンションに住んでおり、アトリエとなる広い場所を求めて、あちらこちらと探していました。探し求めていた物件は、経済的な事情により、だんだんと街から遠く離れていき、山奥になっていき何とも心細くなっていました。しかし、観音様の足元、神社の土地は、神社仏閣や仏像の好きな私達にとっては、何とも魅力的な場所でした。

何も持っていない私は、生涯独身であろうと思っていましたが、ある方から大黒様、えびす様を彫ってくれと依頼を受け、紆余曲折を経たものの、生涯の伴侶をも得ることができました。

マンションは、子供が増えるにつれて、部屋の内部改装をしました。天井の高いマンションだったので、秩父の山の木でとてもワイルドな階段やベッドを作りました。急な階段でしたが子供達は毎日、何度も上り降りしてよく遊んでいました。別室には ロフトのようなものを作りました。下から階段を上がり、潜水艇のハッチのような物を押し上げて中に入るのです。寝室になったり、子供達の秘密基地になったりしました。六畳、六畳の二間もワンルームにして、大きな絵を描いたり、カヌーを作ったり、炭で焼肉パーティーをして暮らしていました。サイクリングをしたり、入間川でカヌーで遊んだり、秩父の山へもよく出かけて遊んだり、作品づくりのために野焼で焼物をしました。

妻が突然、引っ越しますといいだしました。六台あったバイクも駐車代がかさみ、近所の車屋さんに引き取ってもらったのに。

ついに名栗村にやってきました。ここは秩父の帰りに何度か立ち寄っていましたが、まさか住むことになるとは思いませんでした。家が建つまでの半年ほどは借家に住み、荷物もほとんど箱の中のままでした。名栗の冬はいつまでも寒くて、なかなか慣れません。春が待ち遠しくて、すばらしく楽しい気持ちになります。子供達と山歩きをしたり、草つみをしました。子供達は川でも早くから泳いで遊びました。

新居の裏は広く、妻は畑にして楽しんでいました。そこに一部二階の小屋を建てたので、妻にえらくうらまれました。ある人に、この木好きなだけあげるといわれ、百キロの木を一人で持ち上げて小屋を作りました。完成し小屋でカヌー作りをしたり、いろいろ手仕事をしていると、皆さんが、何やっているのとのぞきにきて、毎日の宴会が始まりました。親父のような吉田武彦先生（故人）に出会いました。

おりしも村制百周年を迎え、吉田先生と一緒に百人の作家を集めて、名栗湖で野外美術展をやりました。一九九〇年から八年間続きましたが、最近は小規模にして復活させました。この八年間、いろいろな方々が我が家に出入りをして、飲んだり食べたり泊まったりしていきました。

ドイツ、アメリカ、韓国の作家も大勢みえられて、我が家はひそかに、名栗プリンス山田と呼ばれていました。まるで合宿所のように布団を並べて敷いて十名ほど並んで寝ることもありました。食事などについては、その時々の我が家の経済状態と妻の胸三寸に大きく左右されており、私の出る幕はありません。

そんなこんなで、カヌーを作り、皇太子様もカヌー工房におみえになられました。今はとき吉田先生が健在でおられたら、どんなにか喜ばれたでしょう。一緒に祝杯をあげられたろうにと、残念で寂しい気持ちになります。

（NPO法人 名栗カヌー工房理事長）

「飯能・名栗の石仏」

―石造物からわかること―

坂口和子

○はじめに

平成17年1月名栗村と合併して、新飯能市が誕生しました。飯能市は7地区で約135平方粁、名栗は2地区約60平方粁、埼玉県では2番目に広い行政区域になりましたが、市域の75％は森林という自然環境の豊かな町です。

古くから人が住みつき各時代の歴史を証明する遺跡や遺物も豊富です。

郷土はんのそのなかでも石仏を代表とする石造物は、それらが造立された時代や社会背景、そして私たちのご先祖がどのような“心の生活”をしてきたのかを物語ってくれる大事な証言者でもあります。“心の生活”とは日常のくらしが平穏無事に続くよう、できるだけ災厄をのがれ、福をよびこむにはどうすればよいかを考えて、神仏の御加護を願い敬虔に身を処し、心の平安を得るという精神生活のことでありましょう。

現在飯能と名栗にのこされている造物を比較検討することによって何がわかるのか、両地域の特性などが見えてくるのか、悉皆調査の報告書から、概要を探ってみたいと思います。

○石仏の総数（下限大正時代）
飯能市915基（地区調130基）

新飯能市

旧名栗村159基（〃〃79基）
※面積が飯能市域の半分である名栗村ですが、地区割りにすると集落に造立された石仏の数は約6割になっていますから面積比だけでは比べられません。

○石仏の種類（像容は九分類）
①地蔵菩薩（飯）741％（名）443％
②馬頭観音　〃　〃　〃　〃
③供養塔　〃　〃　〃　〃
④庚申塔　〃　〃　〃　〃
101％　〃　〃　〃　〃
9％　〃　〃　5％　〃
121％
※種類に関しては両地域とも地蔵が一番多く、馬頭観音が二番目、供養塔（念仏塔・名号塔・万霊塔・回国塔・巡拝塔・読誦塔など）庚申塔の順で造立されています。これは全国的にみても同様の傾向です。しかし山間地であるため飯能地域には火伏せの信仰がある勝軍地蔵（愛宕さま）が祀られているのも特徴でしょうか。名栗には少彦名命（薬の神）、午頭天王（疫病）、姥神（咳止め）など数少ないですが特殊なものが造立されています。

○石仏の造立年
一番古い石仏はともに寛文年代です（一六六一～一六七二）。それ以前のものは板碑、五輪塔、宝篋印塔などを除くと皆無です。初出が寛文ごろという点も近隣市町村の状況とほぼ同じと思われます。最古の石仏は飯能では寛文七年（一六六七）高山の三角点にある虚空蔵菩薩、名栗は寛文十二年（一六七二）こうもり岩前の聖観音です。

こうもり岩の聖観音

○造立数が多い年
造されたものを調べてみると、年代によって造立が多かったときと少ないときがわかります。なくなったものもあるので正確とはいえませんが、社会情勢や経済力が背景にあると思います。
飯能は（享保・寛政・文化・安永・天保）の順
名栗は（天保・文化・宝暦・安永・文政・弘化・安政・文久）の順
これでみると飯能は五代将軍綱吉の時代（黒田直邦領）が多く、名栗はそれより100年後の天保がピークになっています。天保は地蔵が主ですが、文化は馬頭が多いところから、馬の需要がふえたことも考えられます。

○石塔の大きさ（地上高）
飯能は小振りのものが多く平均して100センチ以上は9基あります。200センチ以上は9基あります。名栗は100センチ以内が大多数で、2000センチあるのは1基だけです。※両地域とも生産性の少ない土地であり質素なくらし方を考えると大きな石仏、石塔の造立は異例でしょう。

○石質（どんな石を使ったか）
石仏の造立は身近な採石が可能であれば最も経済的ですが、良い石を使うには費用がかかります。伊豆石（安山岩・代表は小松石）も使われています。代表は小松石が多いと聞きます。伊奈石（あきるの市）、自然石、転石、川石、石灰岩（かんかん石）も使われています。名栗は地元産の石灰岩が多く使われています。柔らかくて細工しやすいのですが、水溶性なので融けているものが多く見られます。

○造立者（だれが建てたか）
個人、連名、講中がともにあります。地蔵は目的が供養にあるために個人造立が目立ちます。講中が少ないせいか大勢連名の造立塔はありません。

○まとめ
以上大ざっぱな比べ方ですが、両地域とも山間の集落が多いため、小ぶりで地味な造塔が続けられたと思います。特に飯能市になりましたが全く異和感のない石仏状況だと思われます。しかし江戸期における行政区域を知ることは、各種の産業や集落における祭祀など、広い視野で庶民の生活と信仰を見ることも必要であり、それによって、地理的には確実につながっている両地域の歴史をひもとく資料に石仏の存在はなってくれることでしょう。

郷土はんのう

飯能のまち物語
―織物を中心にして―

松本英男

昨年平成十七年一月一日入間郡最後の村名栗村と合併し新飯能市となった。また本年三月には国道二九九号の中山陸橋が開通し、高麗横丁と云われる狭い難所も渋滞緩和され、県西部地域の活性化が期待される。四月末日の丸広東飯能店の閉店、武蔵広ショッピングセンターのうわさなどあり、中心市街地の衰退が危惧される。

私が飯能の町に関心を持ったのは、商店街の旧所、名跡の絵馬型の案内プレートで、高麗横丁、絹甚、縄市跡などと共に駅前銀座通り十字路に入間馬車鉄道駅前のプレートを見てからである。これは入間川駅前（現狭山市駅）から広瀬、根岸、笹井、野田、岩沢、六道の区間を走る軌道馬車で、明治三十四年～大正六年、大正三年五月武蔵野鉄道（現西武池袋線）の開通まで営業していた。

この頃は織物業も農家の副業から工業生産にかわる前で元小槌織物工場の関係者の話によると、初代藤次郎は近江商人の出で、木綿織物の工場を始め、二代目藤次郎のころ、弟武三郎と力をあわせ、柄や図案に熱心な弟武三郎は、機織を織って需要に合った、木綿縮み、ガス糸縮みなどの研究に実績を挙げ、出身地、近江、関西方面へ細田栄蔵氏と共に売りさばいた。これが後に所沢の「湖月縮」と名声を博した元祖織物である。大正三年の大正博覧会には絹綿交織の乙羽紬（おとはつむぎ）を出品して一等の栄冠に輝いたが、大正五年頃からの生産過剰と設備投資で、特に大正九年の「ガラ」といわれる大恐慌には身動きならぬようになった。しかしまた十一年の平和博には得意の「綿縮み」の出品で一等をかちあ得た。

これこそが、ゆかたより一段格が高い夏のおしゃれ着として売り出された幻の織物「湖月縮」の原型ではないかと思われる。何故ならば、武蔵野雑木林の景観に、湖の発想は不自然であり、近江出身の小槌氏ならではのネーミングではないのか、販売先もほとんど京・大阪・名古屋で販売元の所沢平岡徳次郎商店は関西での模造品対策として、大正六年商号登録をしている。決して所沢料亭末広の座敷での発想ではない。「湖月縮」は飯能生まれであると。

これとは別に昭和初め、川越工業試験所技師、川越染織学校の初代校長高松今男氏の著書『現代織物解説第一巻』には、湖月縮は埼玉県所沢地方より産出する絹綿交織で大部分は冬物であり、近頃夏物も著業者となり到った。又、工前出の小槌武三郎氏は第一回川越染織学校の卒業者であることも、かかれている。

引礼「ひきふだ」

毎日、新聞に折り込まれてくるチラシこのチラシの原型が江戸時代中期に生まれ、明治時代に入ると西南戦争や日清戦争などの影響で人々は多くの情報を求めるようになった。

印刷技術の進歩で色彩豊かな正月引礼は商店が得意先に配ったもの。大阪の印刷業者が図柄を大量に印刷して後から商店名、商品名を刷り込んだものである。柄は恵比寿大黒、宝船、松竹梅、鶴亀などで飯能に残されているものも。これらの図案と共に、飯能の歴史と共に、すばらしい美術品であり末長く保存したいものである。

それから名入れ手拭だが、これも広告の一つで、みな飯能花柳界の芸妓の名入れである。なつかしい人も多いと思うが、織物業者の新年会の席で配られたものとうかがう。残念ながら私は一人も知らないのである。

飯能小唄

平山蘆江

月は天鏡　行幸のお山
麓千年　高麗の里
かすむ川上　流すは筏
水のよどみに　木がもめる
川はひとすじ　飯能でわけて
入間　名栗に流し鮎
口にや　岩根ど　名栗が惜しい
鮎の入間は　お山の自慢
花と紅葉は　木が多い
入間狭山にや　茶のかほり
だれにやらうぞ　飯能みやげ
生絹　白地の織りどころ
わたしや飯能の　白きぬ　生絹
色は　いつごで　染まるやら

昭和五年六月二十七日
東雲亭にて

〈随筆〉

縁側の思い出

田嶋和子

日なたぼっこが似合う縁側、何十年も縁沛を かけ、磨きこんで黒く光った縁側。

子どもの頃、夏休みや冬休みになると、婦人会に入り、入間市の地区。

麦わら屋根のこの家は、主に茶農家でお茶の時期には大勢の茶摘や人が来て、寝泊りしたそうだ。家族の誰もが働き、忙しかったと亡くなった母から聞いていた。

南側には二人でもたれかかれる程の一つに並べたくらいあり、花や畑の作物、豚小屋、うさぎ小屋などが見渡せた。

夏は広々した原を通り抜けてくる風が涼を運び、子どもがスイカを食べるとき、舞いこんだホタルをうちわで追いかけるのも縁側だ。

お正月には双六やカルタを広げ、近所の友だちを交えて、太陽暖房に包まれながらゆったりとくつろぐと、奥の方からもちを焼く匂いが流れてくる。土間の大きないろりは、なべ、鉄びんなどをかける自在鍵が高い天井からぶらら下がっていて、もちは一度に何枚でも焼けた。

こんがり焼けたもちは、焦げ目に醤油がしみこんで香ばしい香りが胃袋を満たしてくれる。切りもちは小学校高学年になるとみな、おやつに三枚、四枚平らげる食欲だ。ほっかりした縁側でこのもちを食べるのが楽しみで何日も泊まった。

従弟の明君は、焼いたもちを醤油につけず、そのまま横のポケットに

郷土館の特別展
「飯能の水力発電」を開催して

柳戸信吾

郷土はんのう

はじめに

飯能にも水力発電所があった！……ではないでしょうか。しかもそれは、村人たちが中心となってつくった発電所だったのです。この隠れた歴史、先人たちの偉業をできるだけ多くの市民に知っていただきたい、そんな想いで今回の特別展「飯能の水力発電～吾野・名栗に電気がひけた日々～」を開催しました。

ここでは、特別展にかかる調査の内容や特別展の状況、今後の課題などを中心にまとめてみます。

吾野・名栗の水力発電の概要

現在の飯能市域へ電気がひけたのは、大正2年（1913）3月1日、帝国瓦斯力電灯(株)による飯能町への供給が始まりです。その後電気の供給範囲は次第に広がっていきましたが、送電線の布設が困難な山間部や将来の需用の見込みが少ない地域にはなかなか電気が引けませんでした。そこで、地元の人々は、自分たちで電気会社をつくり、発電所を建設して自村および周辺の村に電気を供給しようと考えました。こうして誕生したのが吾野水力電気(株)と名栗水電(株)です。吾野水力電気(株)は大正10年（1921）5月から吾野村・東吾野村に、名栗水電(株)は大正11年（1922）8月から名栗村・原市場村に電気供給を開始しました。

開業後は、渇水による発電不足に悩まされたり、建設時の借入金返済に苦慮するなど、経営は順調ではありませんでしたが、山間部に電気を供給し続け、地域の近代化に大きな役割を果たしました。このような中、吾野水力電気(株)は昭和4年（1929）3月に武蔵野鉄道(株)に譲渡されて開業から8年弱で解散しましたが、名栗水電(株)は戦時体制が強化され国策として小規模電気事業者が統合せざるを得ない状況となるまで営業を続け、昭和14年（1939）12月に東京電灯(株)に譲渡されました。

（詳細については特別展図録をご参照ください）

事前の調査

今回の特別展を開催する契機となったのは、これら水力発電に関する多くの史料の存在に気づいたことです。吾野水力電気(株)の発電所の設計図面や関連書類、事務日誌など、貴重な史料が多数残されていました。特に事務日誌には毎日の出来事が克明に記録されており、経営者の生々しい苦労を知ることができました。さらに、吾野水力電気(株)と名栗水電(株)とも半年ごとの営業報告である「事業報告書」があり、その経営状態を解明することができました。

また、現地に水力発電遺構が非常に良好な状態で残されているのには驚かされました。吾野水力電気(株)の水槽や発電所跡、余水路跡などは設計図とほぼ同じ状態で残されており、発電所の構造がよくわかります。名栗水電(株)の延長3,479mにも及ぶ水路は、その約8割が残存しており、そこを歩いてみると急斜面の山肌に水路を築いた先人の苦労が偲ばれます。これらの遺構をできるだけ記録するために現地踏査や実測をおこないました。

特別展の開催

これら調査をふまえ、今回の特別展では、電気会社を設立した人たちの意気込み、経営の苦労、そしてそれらを物語る遺構が確実に残されている現状を伝えることに主眼を置きました。関連する史料や図面類を展示し、グラフ等を用いて経営状態を説明するとともに、水力発電遺構を写真や地図、地形模型等で紹介しました。さらに関連事業として「飯能の水力発電とその意義」と題した講義と現地見学会を開催しました。

見学者からは「地域の忘れられた発電所についての積極的な地調査や文献検討をした内容紹介で感激した」「水路や発電所を築いた先人たちの苦労が偲ばれる」「飯能の代表的な近代化遺産としての価値がある」などの感想をいただきました。

今後の課題

今回は、事前の調査期間が限られていたことも、事前の調査、その概要を解明することにとどまってしまいました。

ポンと入れ、遊びに飛びだしていった。そんな姿をときどき見かけ、けった。そんな姿をときどき見かけ、けいに思っていたが、遊び仲間に分けてやっていたことを後に知った。

また、たこらい家側は、赤ちゃんがまれるとたこらい家を置いてお湯をわかせる場にもなった。農家のお風呂場とトイレは母屋と別棟にある。お風呂から上がると両の日、風の日、雪の日も庭を通って母屋へ入る。冬はあたたまったからだのぬくもりが風に剥がされてしまいそうに寒かった。

何日かたったとき、祖母は左腕に手ぬぐいをかけ、まきちゃんにお湯をつかわせていた。いっぱいに開いた手の平に小さな頭をのせ、親指と小指で耳たぶを押さえる。ピンク色した体はお湯に浮かんで楽ちんそう。

まきちゃんはまだ見えない目を開けたり閉じたりしていた。体中で「気持ちいいよ」を現わす。ガーゼで手ざわよくやさしく洗う祖母の手先をじっとみつめた光景がよみがえる。

そんな様子を祖母と同年代らしい西隣りのおタミさんがよく見に来ていた。私たちは西のおばさん、と呼んだ。品のよい西立ちで「おっさくなったね、おうおう、ほーら」と、目を細めて膝の上に抱きさせる。他家の子も大事にされている日だまりのような心で子どもに接し、好かれたおばさんたちの話に長い前かけをかけた遠い日の姿が偲ばれる。

人が集い、安らぎがある家族の多目的スペースとして利用される縁側母の実家に残る半世紀前ののどかな思い出は、家を建て替えたためなくなってしまった縁側と共に消えていく。

郷土はんのう

残されている史料の詳細な分析や現地の遺構の技術史的な観点からの調査・研究などをすすめることで、さらに多くのことがわかると思います。これは調査・研究面での課題です。また、現地に残されている水路などには崩落している箇所もあるため、その保存と活用も検討しなくてはなりません。この点に関しては、飯能市で現在すすめているエコツーリズムの地域資源として位置づけるなど、地域の人たちが主体となってその保存と活用が図れるような体制をつくりだすことが必要でしょう。

今回の特別展を契機として、このような活動が展開できれば幸いです。

（飯能市立郷土館学芸員）

吾野水力電気（株）水槽跡

名栗水電（株）水路跡

飯能郷土史研究会の活動

◎平成十七年度事業報告

▽総会四月二十四日（土）

講演会『飯能のみんよう』

講師　石井英子氏（会員）

「みんよう」ネットワーク飯能代表

▽例会

○六月二十五日（土）

「飯能のお菓子」

講師　加藤栄子氏（会員）

○八月二十日（土）

―名栗と力ヌ―

講師　山田直行氏

NPO法人名栗力ヌー工房理事長

○十月　郷土館事業協賛

特別展「飯能の水力発電」

―吾野・名栗に電気がひけた日―

○十一月十七日（土）

「飯能・飯能・名栗の石仏」

講師　坂口和子氏（会長）

○二月十八日（土）

「飯能の織物」

―木綿を中心に―

講師　松本英男氏（会員）

◎平成十八年度事業計画

▽総会　四月二十三日（日）

講演会

『埼玉県の災害碑の調査から』

講師　高瀬　正氏

（小川町文化財保護委員）

▽例会

○六月十七日（土）

「南高麗の歴史散歩」

―お祭りを中心にして―

講師　久下文男氏

（前郷土館館長）

○八月十九日（土）

「河童の話」

講師　深堀道義氏

（作曲家）

○十月　郷土館事業協賛

○十二月十六日（日）

「飯能の民家建築」

講師　熊瀬孝之氏

（教育委員会生涯学習課主査）

○十九年二月十七日（土）

「飯能の木材」

講師　岡部知子氏

（住宅建築研究家）

新会員

久下文男氏

飯能郷土史研究会の活動をホームページで紹介

岸　道生

郷土史研究会の事務局がある破草鞋窯のHP『飯能焼　破草鞋窯（はそうあいがま）陶工岸道生』に『飯能郷土史研究会』ページをつくり掲載しています。

内容は、郷土史研の活動および誌『郷土はんのう』から「Qちゃん」とAおじさんの飯能の歴史おもしろ問答」吉田清「黒田氏と飯能」浅見徳男、「伊勢参宮道中日記簿」増岡正文、「帝王切開の地・飯能」高橋通」を紹介しています。今後もできるだけ更新していく予定です。先日はメールで郷土史研究会のことをもっと知りたいと問い合わせが入りました。

HP全体では、飯能焼とは、古飯能焼・教育委員会発行『飯能の遺構』・『飯能市史・通史編』から飯能の歴史・古飯能焼の検証・破草鞋窯の製造工程・ショップ・ギャラリーなどたくさんのページを用意しています。ぜひご覧ください。

http://www.hasouaigama.com

ですが、飯能焼・破草鞋窯・岸道生・飯能郷土史研究会・飯能の歴史でも検索できます。

表紙の写真

吾野水力電気(株)　発電所跡

大正10年（1921）に開業した吾野水力電気(株)の発電所跡。大字坂石の荒延橋の約400m上流に、石垣や発電設備の基礎などが良好な状態で残されています。（撮影　柳戸信吾）

郷土はんのう　第二十六号
発行日　平成八年四月一日
発行　飯能郷土史研究会
（〒三五七―〇一二一）
飯能市中藤上郷四―三
事務局　岸道生（破草鞋窯）方
電話九七七―〇六五四
題字　大野邦弘